

英米文学史講座

英米文学史講座 別巻
文学史の方法・英米文学年表・総索引

昭和 37 年 10 月 20 日 印刷 昭和 37 年 10 月 30 日 初版発行

昭和 43 年 4 月 10 日 4 版発行

監修者 福原麟太郎
西川正身

発行者 小酒井益藏 東京都新宿区神楽坂1の2

印刷所 研究社印刷株式会社 東京都新宿区神楽坂1の2

発行所 研究社出版株式会社 東京都新宿区神楽坂1の2
振替口座東京 83761 番

定価 560 円

目 次

文 学 史 の 方 法

I. 私の文学史講義	
英文学史講義の心がけ	齋 藤 勇 3
イギリス文学史	福 原 麟 太 郎 7
私の文学史講義	西 川 正 身 11
II. 文学史研究の歴史	
イギリスの文学史	矢 本 貞 幹 16
アメリカの文学史	佐 伯 彰 一 27
III. 文学史の概念	
感性の変化と文学史	矢 野 禾 積 39
文学史の成立	工 藤 好 美 45
文学史の理念	平 井 正 穂 50
IV. 外国における文学史研究	
フランスにおける文学史の方法 . . .	杉 捷 夫 56
フランスにおけるイギリス・アメ リカ文学研究	篠 田 一 士 63
ドイツにおける文学史の方法 . . .	佐 藤 晃 一 69
ドイツにおける英文学研究の動向 . .	寺 澤 芳 雄 74
イタリアにおける文学史研究 . . .	野 上 素 一 83
V. 作品研究の方法	
1. Thomas Hardy: <i>Tess of the D'Urbervilles</i>	
大地女神的な異教徒テス	大 澤 衛 89
<i>Tess</i> の研究	成 田 成 壽 92
ハーディの真実	瀧 山 季 乃 96

- 「テス」に表われた明暗 朱 牟 田 房 子 98
2. Virginia Woolf: *To the Lighthouse*
- 私の読み方 高 瀬 省 三 101
- 作品のナゾに引かれて 柴 田 徹 士 104
- To the Lighthouse* の周辺 大 澤 實 107
- 「現代」という方法 野 島 秀 勝 109
3. T. S. Eliot: *The Waste Land*
- 恒久的の対象として 安 藤 一 郎 112
- 「半世界」の詩人 加 納 秀 夫 115
- The Waste Land* をどう見るか . . . 高 谷 毅 118
- The Waste Land* における “sense”
と “nonsense” 高 橋 康 也 120
4. Mark Twain: *The Adventures of Huckleberry Finn*
- 辺境哀惜の歌 野 崎 孝 124
- Huckleberry Finn* 評価の視点 . . . 磯 田 光 一 127
- 現代小説とハック 出 山 桂 吉 130
5. William Faulkner: *The Sound and the Fury*
- より実証的・分析的な方法を . . . 谷 口 陸 男 133
- まず分析、それから総合 高 村 勝 治 136
- 微視的・巨視的視点の統合を . . . 大 橋 健 三 郎 138

英 米 文 学 年 表

- 350 年—1960 年 宮 下 忠 二 143
宮 本 陽 吉

総 索 引 ・ 総 目 次

- 人 名 索 引 271
- 作 品 索 引 288
- 事 項 索 引 310
- 英米文学史講座総目次 319

文学史の方法

I. 私の文学史講義

英文学史講義の心がけ

一 齋 藤 勇 一

i

与えられた題は「私の文学史講義」である。それでは、何か自慢話をしなければならぬような気がする。ところが、私は自慢どころか、恥さらしをするほかない始末であるから、勝手な題をつけて書き出すことにした。

私は二、三十遍ほど英文学史を講義した。英語の教科書をもとにして最初の講義をしたのが、四十何年か前のことであるから、ずいぶん古い話である。それから英文学史を公けにしたのが、1927年であり、その改訂版は1929年、1938年、現行版は1957年に出た。ということは、最近三十年の間も英文学史に深い関心をよせていたしるしになる。しかしそれにも拘らず、私は今もなお、どうすれば適切な講義ができるかと思って、苦心している。

その苦心は、結局、十分に準備することにほかならない。むかし、ある地方の大学の医学教授は、毎朝、便所にいる間に講義の用意をしたという話もあるが、いかに初歩の概説であっても、そのようなことで済ます学者は、今はないだろう。十年も前の統計表を茶色になったノートから読みあげて経済学の講義をした人や、駄洒落の連発でごまかした人なども、このせちからい現代では葬られてしまうだろう。同じ主題の講義を毎年または一年おきにしなければならぬばあいでも、今の教授は必ず何かちがった例をあげるとか、最近の研究をとり入れるとか、いろいろな工夫をしてい

るであろう。

文学史について言えば、数えきれないほどおびただしい作品のうちの代表作について説明するとしても、その作品を読み返せば必ず何か新しい点に気がつくだろうから、その新しい印象を話せば、聞手は興味を深めるであろう。新しい発見でなくとも、記憶が清新であることは、すべての講義にも講演にも必要な条件であるまいか。さきに一言したとおり、私はそのような準備をするに苦心を惜しまない心がけでやって来たつもりである。ただしそれが十分であったとは言えない。ただその心がけを今も失わないだけのことに過ぎない。

準備が思うようにいかない時は、いっそのこと休講にする方が本当かも知れない。しかし全体の計画を考えると、一回二回の休講もさしざわりになる。それで心ならずもまずい講義をする。学生にも悪いが、当の本人はまことに面目ない。曾て湯浅常山のおぼえ書き「文會雜記」を読んで、「春臺は会談に必ず下見をして、下見のなき所は会もせられずとなり」とある一節に考えさせられたことがある。太宰春臺も荻生徂徠の門下であるから、常山とは相弟子である。常山は、この先輩が準備のできないばあいには講義をしないことを感心したのである。学問についていやしきもしないこの心がまえは、私も学びたい。しかし今日の大学では、そう休講するわけにはいかない。しゃにむに準備をするほかない。けれども、ねじりはちまきでやるのでは文学の味読がむずかしい。味読するだけの余裕も大切である。Studium (熱意) と schole (余裕) とが二つながら必要である。

文学することは、ほかの学問よりも複雑な仕事である。一步踏みちがえれば、ただ物知りとなり、または dilettante になりかねない。文学愛好者は誰でも dolce far niente (閑日月の楽しみ) にふけりたいであろうが、講義をするには毎週何曜日の何時までかに用意を済ませる工夫がいる。「春臺は至って精力のつよき人ゆゑ、明日の事を今日しまひおかるるものなり」と、これも「文會雜記」にある。そのところを見ると、この工夫は、毎日

きちんとその日の仕事をしてしまっておくことらしいが、それは我々凡人にはまことにむずかしい。

私は茶の作法などを知らないが、とにかく一代の茶人、千利休は「一期一会」(いちごいちえ)と言って、この茶会は一生に一度のものと心がけていたらしい。この講義は一生に一度のもの、ゆるがせにできない、と考えてやりたいものだ。しかしそのために肩がこってしまつては、講義もうまくいくまい。工夫を超越するところまで進みたいものである。

ii

私は、文学史の講義には教科書を用いることにしている。文学概論については、批評の原則はもとより説明の順序などがちょうど自分の考えと一致しているか、せめて近いものであるならば、それを教科書とすることができのけれども、あつらえ向きの著述が中々見つからない。しかし文学史ならば、叙述に関するかぎりはまず大同小異であるから、講義をする者の満足し得る教科書を見出だすことはむずかしくない。ほんの一例をあげれば E. Legouis: *A Short History of English Literature* translated by V. F. Boyson and J. Coulson (O. U. P.) などは手頃のものであろう。それに併行して代表的な詩文の抜萃集を一週・二時間も講読するならば、講義が生きてくるだろう。とにかく講義を口授するような戦前までのやり方は、はかばかしく行かない。ことに私は原則として英文学史を一学年間に(ちなみにアメリカ文学史は半学年間に)やってしまうことにしている。それには教科書を用いることが必要である。著作者や作品の綴りまで教えるのではてまどり過ぎる。

またなぜ一年で全史を講義するかと言えば、学生が卒業論文の題目選定に困らないようにまず概観を与えるためである。学生は英文学発達の大勢を早く呑みこまなければ、或る局部、即ち偶々一瞥した或る時代、というよりもむしろ或る作者または作品に眼界が限られてしまいかねない。また

全史の概観を知っておれば、なぜその作者または作品がそのようなものとなったかがわかりやすい、従って批判も眼界のひろい公平なものとなるであろう。それで、できるだけ早く一応文学進展の経路を示しておくことが親切だと思うのである。専攻学科修業時期二十年のうちに卒業論文を書かせる現状から見て、私は一層この感を深くする。

一年間にやってしまうには、かけ足で、思いきり急がなければならない。中世前期を一回で済ませるという風にして、中世後期が三回、ただしそのうちチョーサーには二回、それからシェイクスピアには三回、ミルトンには二回、と重点主義で取捨選択してやれば、第十九世紀以後が割合にくわしくやれる。せめて二十年にわたる英文学史の講義をする方が、らくでもあり面白くもあろうが、学生が専攻学科として英文学を勉強するのが二十年そこそこになった今日は英文学史を一カ年でやり、そののちは特殊講義として或る時代を詳述することがよい、と私は思う。

iii

要するに、文学史の任務は、文学の史的展開を明らかにすることである。そして文学の史的展開は伝記に関する事実の累積だけでわかるものではない。拙著『イギリス文学史』第四増補版序に書いたように、何よりもまず作品の意義をわきまえて正確に批判することが大事である。この内的経験を誤りのないものとし、かつ豊富なものとする助けとして、著作家の伝記、その時代相、国民性などの検討、即ち外的調査がなされる。そしてもし内的経験をおろそかにすれば、作品論のない伝記、文学を材料とした世相史、社会史、国民性論などとなる。(E. K. Chambers の *Coleridge* は正確な伝記の模範ではあろうが、詩人、批評家、思想家として Coleridge 研究ではない。また V. L. Parrington の *Main Currents in American Thought* は一般思想史としては名著であるが、文学史ではない。) それに反して、外的調査を無視すれば、作品の批評が憶測におちいり、ひとりよ

がりの印象を重んじ過ぎる危険を冒しがちになる。テヌのように外的事情に重きを置いた批評家でも、第十九世紀の詩人、ことにテニソンなどについて伝記を知らなかったため、大いに誤解している。(彼がシェリー、キーツ、ブラウニング、アーノルドなどを無視したのは、ほかの理由によるだろう。)

文学史は文学批評と文学に関する各方面の事実とを総合して各時代の変遷推移を述べ、かつ各時代の作品、作家の地位を定めなければならない。その任務は中々重い。時代の推移について私は今でも、英文学史においては自由と法則との交代もしくは調節が主潮であると考えているが、それはもちろん大体の傾向である。個々の作品については、今なお断えず専攻学者の教えを受けて啓発されることを努めている。ただし日暮れて道遠しの感なきを得ない。けれども、この道は行く人多し年どしに。

イギリス文学史

— 福原麟太郎 —

与えられた題目の「私の文学史講義」といえるほど大した講義をしたことがあるわけではない。けれども大学と称するところに二十五年勤めていたわけだから経験がないとは言えない。ことに私は、どんな講義をしてもみんな文学史的であった。

文学史的であったという意味は、文学という現象の存在には、時間と時勢につれて、流動するものがあり、それは自然の勢、因果の関係、偶然の介入などによって、代々の社会に受けつがれ伸展してゆくものであるという見方で文学の現象を説明しようとする態度をいうのである。だから私は、作品をもって文学の単位とするという立場にはいたが、その作品を製作発表の年代順に並べないで論じたことはなく、そうすることによって、

自分の文学史的——別の言葉で言えば文化史的興味を満足させていた。

私は天才が作品をつくる、それが文学であるということを信じていたが、それを読む読者があり、その間に出版者というもの、あるいはそれにあたるものが介在して、天才もそう自由にふるまったわけではなく、天才が与えようとした当の人々に必ずしも読んでもらえたのでもないことを考え、それはそれで面白い文学の生態であるとして、そういう観点を用いたことがないでもなかった。しかし、要するに文学は美しいものなので、その美しいものが時に有益なものであったので、美しいものを持っていない作品など文学作品とは言えないと確信していた。そういう意味では、文学作品は、時間と時勢とを超越して存在しうるものであった。

さてそこで私にとって、文学が特に私に訴えるものは、その美とそれから人間的興味とであった。人間的興味を持っている美が一ばん私に親しかった。対比される例をもってくるなら、私は宗教的な美を直覚する力に欠けているから、宗教文学には興味がなかった。私を動かす宗教的興味は、人間性一般の中にある宗教的神秘感くらいに限られていた。だからそれは、とうてい宗教文学に対する興味とは言えなかった。自然文学についても同様であった。自然そのものの美しさを歌う文学は私を堪能させることができなかった。私の三十歳のころ私たち日本人の文学生活は社会文学の渦巻の中に巻き込まれたけれども、私は宣伝を主とする文学作品の煽動や、それを正当化しようとする指導理論にとらえられる事を喜ばず、そういう作品を美しいとは思わなかった。人間の文学が私の文学であったから、私の文学史講義はおそらく多分に人間の文学の講義であった。

だから恐らく私は、文学精神の伝承ということを、主として人間的興味の伝承に生れた美の系譜として語って来たであらうと思う。そういうところ以外に私が自分の問題として文学作品をあるいは文学の歴史を扱う、いくらかの自信というごときものは無かった。

文学史というものが、単なる文学の作品の年代化でないということは今も述べた如くであるが、私は作品ならびに文学の歴史についての知識をかなり重視するところがあったから、ことによったら、私は教室で文学史という知識を口述しただけにとどまっているかも知れない。あまり立派なこととは言えないのである。朝日新聞社で出た『英文学』（昭 26）という本は、2 ケ年で英文学史の全体を一応講義するという課程があって、その仕事を何回か繰り返した、その折の覚え書きを種にして自分で筆を取って書いたものだが、多分に知識的で、英文学という生きものの成長の歴史だというふうには出来ていない。あの程度のことしか私には出来なかった。ともかくありきたりの知識を与えることは必要だと思ったし、文学的展開ということをあまり強調しすぎて、図式的になると、どうしても無理をするようになるからと思ったところもあった。

あの本の序文で私は「文学の存在する形は作品だと信じ、それは歴史的に存在しているものだと思っているから、結局文学を歴史的に記述することになった」と書いている。今もそのとおりに考えている。これを別の言い方で言えば、文学というものは、つまり、その国民の生活の歴史なのである。歴史だから一回性のもので、決して繰返さず、抽象を許さない。全文学作品を総合してその中から英文学概論を抽象することはそういう考に立てば、不可能だといわなければならない。あの本は『英文学』と題し、英文学概説を書くはずであったがそんなわけで、結局、歴史を書いて、これが英文学というものです、ということになった。不十分で決して成功してはいないけれども、文学は歴史であり、英文学というのは英文学史であるという思想によったものであった。そこであの序文では、あの書に記してあるすべてが「現在に生きている英文学なので、歴史というものが、現在に持っている意味に従っていえば、これが今日の英文学の総体である」と書き加えている。

しかしそのようにして書かれた英文学史即ち英文学概論も、何か特殊な理法とか一貫精神とかいうものを持っておりうるのではないか。抽象を許さぬ一回性的現象としての作品の歴史的配列でも、これをつくづく眺めていると、そういうものを発見したい慾望が必ず起るものであろう。

私は大英博物館で勉強するためと、芝居その他の舞台芸術に淫したい慾望のために、留学期間全部をロンドンに過し、すこしばかりロンドン大学というところに親しんだことを不思議な良縁であったと思う。私は 1929 年の新学期、イズレール・ゴランツ (Sir Israel Gollancz) 先生のこの世における最後の学年の第一回の講義に、先生得意の英文学伝統論を聴聞し得たことを幸福とする。そのことは何度か何かに書いたから、今ここにくりかえすのを恥かしく思うけれども、拙著『春興倫敦子』(しゅんきょうろんどんし、昭 10、研究社)によると、「先生は黒板のまん中へ拙い正三角形を描く、『これが私のイギリス』そこでどっと皆が笑ふ。先生はそれからその底辺に並行する二本の直線を以て、この正三角形を三分して見せる。上の二つの区切がアングル人の定住したところで、底辺の一区切がサクソン人の定住したところである。『初は文学の中心が此処いら、つまりアングル人のゐた北部英国にあった。ところが後になると、南部つまりサクソン人の方にその中心が移った。それがですね。又後には東寄りと西寄りと二つになった。これは面白いことです。』そこで先生は正三角形の頂点から底辺に垂直なる線を一本描いて、メリ・イングランドをまっ二つに切つて見せる。そしてチャーサーまで到達する。そこで先生は、この時、[西寄りにラングランドの] 教訓的な文学と [東寄りにチャーサーの] 芸術の為の文学と二つあったことを主張する。然し、そのうちに、これら相争ふが如き二つの文学上の態度が、渾然として一致しうる時が来たことに言及する。『それはスペンサーに於てである。スペンサーこそは英詩の父であり又母である。その母胎は遠く民族定住の古に淵源してゐる。はるかにアングル人、サクソン人たちの生活に源を発してゐるのである。』」とゴラン

ツ先生は言葉を結んだのであった。これは私の開眼であった。

それからもう一つのコレッチで英語英文学を教えていたチェイムバーズ (R. W. Chambers) 先生、この人の『人間不屈の心意』(*Man's Unconquerable Mind*; Jonathan Cape, 1939) は帰朝してから読んだ本だが、これにもびっくりして頭を下げた。チェイムバーズ先生は、人間の心意が歴史を作る、英文学は英国人の一貫した「不屈の心意」の表明の歴史であるとする。先生は、文学研究における主義、潮流、影響、傾向などという考え方を絶対拒否する。文学の歴史はひたすらに人間の叡智と創作の一本のつながりなのである。あの寒巖枯木のようなチェイムバーズ先生が、そうまで熱意と信念とをもって英文学の歴史を見ていたのかと私は、唯々感心したのであった。この二人の先生から私は文学史の考え方を学んだ。

私の文学史講義

— 西川正身 —

私は、現在の勤め先で、アメリカ文学講座を担当している関係で、真にやむをえず、毎年、アメリカ文学史の講義を行っている。やむをえず、と言うのは、アメリカ文学史の講義を行う資格など、自分にはまったくないことを、人に言われるまでもなく、自分自身、よく承知しているからである。と言っても、もちろん、責任を回避しようというのではなく、私なりに精いっぱい努力をつづけていることは、つづけている。だが、それにもかかわらず、講義をおえて教室を出るたびに、うしろめたい気持ちにおそわれ、自己嫌悪に陥らないではいられない。

私がアメリカ文学史の講義を初めて行ったのは、1940年、今日の一橋大学に職を奉じていたころのことである。1940年と言えば、日華事変が始まって4年目、ヨーロッパでは、前年の1939年に、英仏とドイツと

のあいだに戦争が始まっていた時代である。そういう世界情勢を反映して、私たちの周囲では、英米を敵国視し、敵性と見なされるものはすべて無条件に排撃するといった風潮が、しだいに盛んになり、私たちにたいして無言の圧迫を加えつつあった。私がアメリカ文学史の講義を始めたのは、こういう時代であればこそ、イギリスなりアメリカなりを真面目に研究しようとするのが、かえって本当なのではないか、と考えたからである。したがって、何もアメリカ文学を深く愛好するから、と言うのではなかった。言いかえれば、内面的な欲求からというよりは、外的な原因から始めたことであった。だが、その一方、のちに使われるようになった言葉を借りて言えば、周囲の情勢にたいする抵抗感が働いていたために、かえってアメリカ文学の研究に一種の情熱が持てたことも事実である。

ところで、講義の準備にとりかかってみて、何よりも困ったのは、当然目を通さねばならない著作について、テキストが手に入らないことだった。ことに、十七、八世紀の著作となると、ほとんどまったく、と言っていいくらい、テキストを手にするができない。そのような場合、向うの然るべき人が編んだアンソロジーを利用するという方法が考えられる。なるほど、学生諸君に使わせるというのであれば、アンソロジーを利用するのも、結構なことだろう。だが、かりにも講義をしようとする者が、原著につかないで、アンソロジーですませようとするのは、あまりにも安易にすぎる。どれほどよく編纂されていても、アンソロジーはどこまでもアンソロジーにすぎない。アンソロジーだけですませようとする人は、原著を編者の目を通して見て、事足りりとする者である。言うまでもなく、何事によらず、すべて自分の目で見て行くことが必要だ。と知りながらも、テキストが手に入らないのでは、どうしようもない。文学史の方法も、時代区分の問題も、何もあったものではない。

それでも、“Original Narratives of Early American History” が図書館にあったので、ウィンスロップ (John Winthrop) の『日記』や、ジ